

A—62 都市における主食形態の格差と動向

人口問題研 内野 澄子

(1) 本報告は昭和38年において、東京、大阪、名古屋、仙台、広島、長野、都城、能代、の8都市について行なった労働力人口の移動調査結果の1部を基礎としたものである。

(2) ここでの主食形態というのは、1日3回の通常の食事において、(a) 朝昼夕ともに米食 (b) 朝食がパン食 (c) 昼食がパン食の3個のカテゴリーの分類によるものである。さらにこのような主食形態に対する将来の希望もあわせて調査を行なった。

(3) 戦後における食生活が巨大都市、地方大都市、中小都市においてどのように変化しつつあるか、またどのような方向に進みつつあるかをあきらかにしようとしたものである。

(4) 特に、食生活に対する関心が単に所得水準のみならず、マス・コミの影響を強くうけることが予想されるだけに、主食形態の変化やその志向の方向を合理性あるいは近代的意識の有無との関連において考察を行なった。